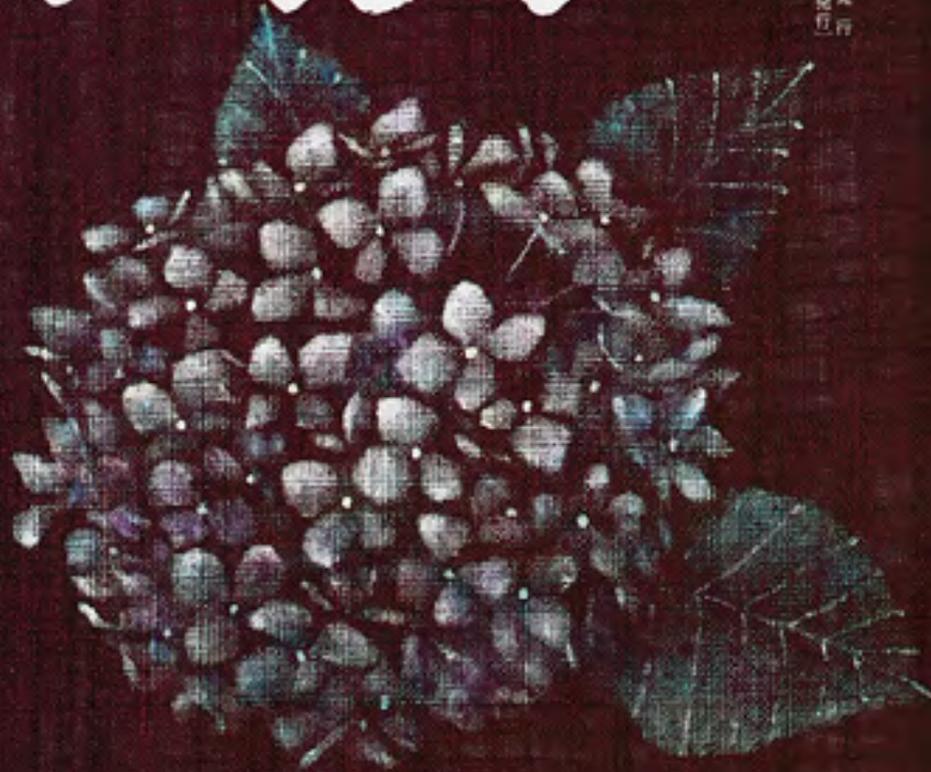


京鹿子

昭和元年六月一日発行
第百一三十八号(五月一日発行)



6月号

鈴 鹿 呂 仁

拾 掬 集 その 四 十 五



いろはにほちりぬる漢はるのよひ
街騒に風抱く女や春の宵
ゆきやなぎ阿る風の片想ひ
ゆきやなぎ天は帳を下ろし得ず
花洛忌や椿一つをさがす旅
人形の一涙の頬飛花落花

漆喰の翳にじみだす梅雨の月
金魚食ふか喰はれるかランタンの灯
寸取虫寝違への朝雨催ふ
衣更ふねねの小径の異邦人
危ふきは木曾殿の背^ナ木下闇
草庵の結び目に翳夏の蝶
木曾塚へ満天星の花付き添へり
浮城や鳩の浮巢の揺るぎなし

— 近 詠 —

鈴 鹿 仁



百 獣 の 王

百 獣 の 王 へ 肖 る 子 供 の 日

夏 が く る 空 缶 派 手 に 風 遊 び

行 く 春 の 大 琵琶 を 斬 る 観 光 船

— 追 懐 —

大 みどり 宙 に 延 び た る 麒麟 の 木 (平成十三年作)

古 き 巢 の 藁 一 筋 の 風 の 儘 (")

—
近 詠
—

和田 照海

旅人の海

静止画に風の生まれて春鶇

ひらがなを書き損ねたる蜷の道

一湾を迫り上がりたる春の鳶

妻恋の旅人の海や魚島時

みゆき野の花の一会の蕙かな



松本 鷹根



庭 豌豆

点滴に日々を委ねて病む日永

沈丁の香に影伸ばす夕散歩

微風の暈す池面の春景色

庭豌豆いま白妙の花そよぎ

学校のさくら咲き満つ風に住む

近 詠

塩貝 朱千

三角波

藪椿老僧大き木沓提げ

音たてて青竹つたふ春の水

定家の書なぞる指先風やよひ

あしかびや湖碧き日の三角波

暗雲の犇めく空へ春鴉

英華採集

つれづれの日永を刻む秒針音

和歌山 宇田篤子

暦の上では最も日の長いのは夏至の頃を言うが、日の短い冬が終わった後の春の日永は実感として昼の時間が長くなったと感ぜられる。そんな春の日の一日ゆったりとした時間を過ごすことが出来るのは正に至福の思いを味わっているのである。普段では余り聞くことのない時計の秒針の音まで作者の耳を心地よく擦りつけてくる感覚が中七の「日永を刻む」の措辞によく表れている。こんな一日を持ちたいものだ。

ポケットの打ちかけメール春の雪

京都 厚芝唯菜

昨今、情報の伝達手段は手紙や電話よりメールで済ましてしまう人が多いのではないかと、若者の間ではメールにもSMS、SNSなど色々なサービスを利用していているよう。スマホの扱いには手練れているのであろう。メールを打ちかけていて他の用事に気を配るのも何の雑作も無いことに違いない。掲句は季節外れの春の雪に気を取られた作者の心の中の様子を省略を効かせて十分に語っている。ポケットのスマホと春の雪の雪の取合せに若い女性のナイーブな心の機微を響かせている。

啓蟄や影もつもの動き出す

福山 山崎英子

春になり眠っていた虫達がぞろぞろと這いだしてくる季節は、森羅万象輝き増してその命を樂しむかのように活発に動きはじめだす。それに合わせて人の気持ちも明るくなり心の中も内向きから外向きへと変化していくのである。掲句の中七の「影もつもの」という大きな断定が、春を迎えた喜びを全身で表している生きとし生きるもの全てに当てはめている。漲る躍動感にあふれた一句となった。

神麓集

春惜しむ

藤岡紫水

紫衣の僧五彩の散華風光る
春光や海苔乾くいろむらさきに
春惜しむあるかなきかの雨を聴き
蛤や五客の椀の輪島塗
潮恋うて鳴くや厨の夜の浅蜷

凌霄花

沼田巴字

一人野を行けばせり出す河鹿笛
水盤や小蟹二匹を遊ばせて
よしきりや師の口伝なる法句経
蠅虎読経の中をはしりけり
凌霄や火の鳥としてはばたかん

雀頭

丸井巴水

雀頭の墨痕さびず野風呂の忌
寒ほてり撫ぜ欄干の叫びあり
眼前の山河ほどける春の風
首塚の花が終はらば胴探し
帯刀を許され神の樹に蜂巢

青き踏む

植村蘇星

三、四の手読みの深さや春疾風
先哲の心根是に木の芽風
硬軟に生かされ生きて青き踏む
墓のみとなりし古里草萌ゆる
少子化にもてはやされし子猫かな

神麓集

むかしの瞳

北川 孝子

春の宵地球も深く呼吸せり
一笑のあとは瞑想春今宵
自画像のむかしの瞳鳥雲に
耳鳴りは亡き人の呼ぶ春の宵
心音のあふれてきさう春今宵

白 鳥 直江 裕子

東京の雪が木の橋探してる
ニン月や片目をあけた眠り猫
白鳥の青ざめて見ゆひと日かな
胃の腑まで覗かれてゐる三色すみれ
白梅や永遠に未完のままの稿

昭 和

高木 晶子

金継ぎの山茱萸の空一日良し
鯉跳ねて飛び立つ蝶の透かし彫
ひとひらの花も許さぬ黒机
落の臺現在位置は昭和なり
腰掛けて居る私に山椒の芽

妣お在す 伊藤 希 眸

妣お在す蓮華野どこまでも無量光
野火奔る地平線まで見てはしる
花の夜の記憶ガラスの厚さかな
夜気にまだ花の匂ひやさざめきや
椿まつ赤ぼつと落ちたり四肢の麻痺

神麓集

棧 奥田筆子

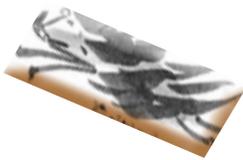
耳の日の半分に聞くほめことば
棧ばかり拭きてをんなは陽炎に
春日覚めいつから流砂の重さかな
鳥雲に浮木ごつんと寝返りす
耳にぽかん空気の抜けて豆の花

遊んでおいで 井上菜摘子

ここへきて侘助のだんまりに遭ふ
絶对王者椿のうしろ通るかな
黒板消しとふあたたかや勝つてきて
きさらぎの隅へながせりわが芥
遊んでおいでたんぽぽの絮吹いてやる

一揆街道 村田あを衣

一揆街道さくらにまみゆ石仏
城址かな又裏返へる春落葉
満天星の鈴よ木曾恋ふ巴塚
行く春や湖のたひらへ手を浸す
春落葉踏めば義仲寺語りかな





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

京田辺 山中志津子

城陽 鷺山 珀眉

城址は千年の過ぐ初蝶過る

風音を潜めうすらひ月夜なる

雨脚は絹のひかりに水草生ふ

けいちつや言葉の素数蠢きて

山水のおぼろの奥の白拍子

未来図は曲線ばかりスイトピー

世の中は人工知能と菜の花と

仏心はときに崩れて落椿

遺影にもある日月や沈丁花

水替へてあさりの愚痴の流れゆき

伸び代は何色ならむ梅ま白

まつさらな思考回路の雪解風

廃校を囲みて土筆整列す

水仙の息つめてゐる夜汽車かな

葛城に神話生まるる春の霧

片手まだポケットのの中寒明くる

愛犬の甘噛み二月十四日

クロスワードの空白を埋む雪解風

芽起しの風ぼつくりの音連れて

六段のしらべ春陽の射す茶房

京 都 井尻 妙子

京 都 片山 熙子

一の橋二の橋春の水急ぐ

福 山 亀井 福恵

春立つや川は素顔を取りもどす

鷄来る峽の日和をふるはせて

来る波に來る波あらた梅真白

桜餅この身いつしかこはれもの

平成の災は神戒春の闇

のどけしやついと財布の紐ゆるぶ

内裏びなも当主も米寿なりにけり

護岸工事に抗議してゐる百の鴨

まんさくの長きねぢれを風の解く

行間にあふるる命芽木の章

蜷舟点となりゆく暁けの湖

季の音に耳目そぼだつ水仙忌

カットして啓蟄の風身にまどふ

履歴書を三通胸に地虫出づ

玻璃いちまい弥生の空と海一枚

邂逅は福耳の人涅槃西風

南無空のひかりとなれり野水仙

鉄色のカーテンの鬢春の鬱

青きボールにビタミンサラダ春の雪

高 槻 安田 優歌

京 都 菊池 和子

福 知 山 西村 滋子

つれづれの日永を刻む秒針音

和 歌 山 宇田 篤子

未知の扉を開けてあしたへ春一番

眼鏡拭くこんがらがって句意おぼろ

ふと洩らす独語に本音春の風

ポケットの打ちかけメール春の雪

本日も記録更新春一番

曖昧な君の背よ朧月

春泥や年少組の列乱る

啓蟄や影もつもの動き出す

片言の幼のあゆみ春陽ざし

ものの芽に元気をもらふほとけみち

記念日にマリンバ演奏春の色

春泥の巨大農機やプレーター

春寒し「既読」にならぬメッセージ

乱気流着陸のどか定刻に

春の夜胡床居妣のオルゴール

アリゾナ 伊吹 之博

福 山 山崎 英子

京 都 厚芝 唯菜

